

WAY プロジェクト(校内道德教育推進委員会)レポート・8 2019・11/7(木)

今回は、もう3回目の参加になります土屋先生をお迎えしての開催となりました。他にも斉藤さんや仲川さん、石口さんといったいつもご参加くださるメンバーに加え、葛上中学校の岡部さんと光川先生が初めて参加してくださいました。

今回はいつもと少し形式を変えて、対話の流れから様子を伝えたいと思います。

以下、内容です。

今回は、12月2日(月)からいよいよ哲学対話を取り入れた授業を始めていこうと考えているのですが、その1回目のテーマを何に設定するかということについて、論議を行いました。

「この WAY プロで話したような、例えば『勤労』についてのような内容は、中学生でも可能なんじゃないかと思う。それぞれの言葉に対して、その本質を対話の中で深めていくというのも一つのやり方なのではないかと思う。この WAY プロの様子を中学生に見てもらうのも意味はあると思うし、ここに中学生が入っていくというのも、あるいは中学生の中に先生や保護者、地域の方が入っていくのも、すぐではなくても先々のところで面白いと思う。この WAY プロでされていることは、22の項目の一つ一つに関して、その本質を考える営みだと思うので、中学生のスタートにも良いのではないかと思う。」

「じゃあ、それでいくとして、22個の項目の中で、取っ掛かりとしてどの項目がいいと思われませんか？」

「例えば、善と悪なんかは、中学生が語り尽くせないのではないだろうか。節度、節制、自主、自律、自由…まだ実験段階なので、どうだろうか。」

「この22項目を大きく分けた4つの柱は、ちょっと儒教っぽくて、身をおさめて、家をおさめて、国をおさめて、天下をおさめるという流れだよね。例えば自分のことをテーマにしたら、子どもたちから色々な例を出してもらわないといけないし、自然愛護や生命の尊さは理科と繋いだほうがいいし、国際理解だと社会と繋いだほうがいい。差別問題は公平公正社会正義とつないで扱っていくことが多い。身近なところから始めてもいいし、遠い内容から始めても、いずれは身近な項目につながってくる。だから、1個だけと考えずに入り口だと考えて、いろんな所に絡んでくると思っていたら良いのではないかと私は考えています。」

「順番はどこから持っていっても良いのではないかという話ですね。」

「大正中の軌跡の第2巻を読んでいて、授業改革の部分を読んでいると、大きなところを学んだ時に、細かな所に目が向き、必要性を感じ、学につながるというのを見て、その流れも良いのではないかと思った。」

「私は保護者の立場として、思いやり・感謝が良いのではないかと思う。世間を見ている、今、大人でも厳しいところがたくさんあるので、基礎的にそこを教えてもらって、それからいろんな内容に入っていけば良いのではと思う。」

「身近なところからいくのか、とりあえずのゴールを見せてから一つずつ見ていくのか。今、こんなのがでているが、他にもイメージを出してもらえれば良いのではないのでしょうか。」

「2年生を対象に哲学対話をするのですが、まだ1度も実施したことがない状況で、方法に慣れていないからどこまで討議が進むかも分からない状態で、練習問題のようになってしまう場合が考えられるという状況をお知りおきください。」

「思いやりというのも良いかもしれないが、生命の尊さのように大きなものから入って、生命の尊さって何？そもそも生命って何？みたいに思考の訓練をしてから、入っていった方が良いかもしれない。そこから、思いやりなどの近いものに入っていった方が、深まるかもしれないね。わかりやすいところから入って、わかりやすかったら、わかりやすい所におさまってしまうかもしれない。よく分からないところから始めた方が、より考えるんじゃないかな。より良く生きるとかね。より良く生きるってどういうことなんやろ。畏敬の念とか、感動とか。最近、何か感動したことある？」

「いやあ、パッと出てこないな。」

「俺なんかは、遠いところから土屋先生やいろんな人が毎週来てくれはる事に、感動やわ。」

「本当ですね。他に感動したことってありますか。」

「那智の滝」「武田城の雲海」「富士山」「天橋立」

「自然が多いですね」

「ラグビーを見て感動したとかもありますけどね」

「スポーツを見て感動はありますね。」

「ところで、より良く生きるの、より良くってどういうことなんやと思う？」

「より良く生きれたら良いんやけど、いろんな悲惨な事件とかが日々報道されるよな。」

「より良くって考えると、自分はより良く生きてるのかな。」

「より良くって、『今』より良くって意味だよね。」

「じゃあ、自分は常に前を向いて『今』をより良く生きていると思う人。」

「より良く生きるから入って行って、そもそもより良く生きるとはどういうことかということを考えていけば、勝手に自分はより良く生きているかというような所に思考が進んでいき、どういう時により良く生きていると感じるかという風に、具体的に詰まっていくのではないかな。」

「子どもたちは充実しているのが良い生き方だと思っているんでしょうか。例えばあいつ休んでゲームできて良いなという声もたまに聞こえてくるので、子どもたちの中で良い生き方ってというのがどんなものなのかは、すごく気になります。僕ら大人は、いろんな事があって充実してたら良いと感じる事があると思うんですけど。」

「いつその感覚は変わるんだろう。」

「この前、葛上中の子たちに聞いたら、家から出なくて、朝起きなくて、好きな時にゲームできる事が良いと考えている子たちがいた。友達というキーワードがなかなか出てこず、仲が悪いわけではないけれど、繋がりが薄い部分があるかな。」

「大正中にもそういう子はいるけれど、多くは友達や周りの子たちに構いに行くからな。」

「ただ、その話だと、より良い学校生活とか、集団生活の話になってきているのではないかな。良いのベクトルが気になる。良いの価値観の押し付けにならないように気をつけなければならないと思う。」

「じゃあ、例えば『良い』を『充実』と捉えた時に、ゲームをしていたら充実しているという考え方があれば、毎日思う存分ゲームをすればより良く生きるという事になるのでしょうか。」

「人間はちょっとでも出来る様になれば喜びを感じるわけで、ゲームはレベルが上がったりするから、そこに充実感や喜びを感じるんじゃないかな。」

「学習指導要領を見ていると、小学校5・6年生では人間の強さや気高さというプラスの方向を入れようとしていて、中学校では弱さや醜さという弱い部分を認めてさらに良い方向になるんだよという考え方なのではないかと思う。」

「良いて結局、なんなのかな？善なのかな。」

「みんながそれぞれいいと思えば、いいんじゃないのというところに来る。」

「じゃあ、なんでも有りとなるかというそうじゃない。これは入り口でありゴールなので、より良く生きる喜びから初めて、いろんな項目を考えた上で、最終的にここに戻ってくれば、なんでも有りとはならないと思う。例えば出てきたより良い生き方が、僕たちが考える悪い生き方だったとしよう。差別するのがいいとか、人を見下して生きるのがいいとか。それもそれでいいとはならないよね。学校でサボってたら良いんかとなったら『集団』のところに行ったり、仕事サボったらいいんかとなったら『勤労』のところに行ったり、家族叩き回してたらいいんかとなったら『家族愛』のところに行ったり、友達裏切ったらいいんかとなったら『友情』のところに行ったりしながら、最終的にまたより良く生きるに戻ってきたらいいんじゃないかと思う。」

以上のような話の流れから、初回の哲学対話の授業は「より良く生きる喜び」から始めていきたいという結論に至りました。

次回は C15「よりよい学校生活、集団生活の充実」の項から、WAY プロジェクトで議論をしていきます。

(文責: 松浦)

